

一般用医薬品の適正使用に貢献できる薬剤師育成のための卒後教育プログラムの構築とその効果

○佐々木 圭子<sup>1</sup>, 藤田 吉明<sup>1</sup>, 小田中 友紀<sup>1</sup>, 原 和夫<sup>2</sup>, 中村 明弘<sup>1</sup>, 吉田 武美<sup>1</sup>, 亀井 美和子<sup>1</sup>, 戸部 徹<sup>1</sup>(<sup>1</sup>昭和大薬, <sup>2</sup>望星薬局)

【目的】保険薬局がかかりつけ薬局として機能するためには、一般用医薬品の適正使用にまで貢献できる薬剤師の育成が必要である。この目的を達成するため、本研究では、保険薬局を対象とした卒後教育プログラムを開発した。また、このプログラムを保険薬局に勤務中の薬剤師に実際に実施し、比較対照試験を用いてその効果について検証した。

【方法】プログラムは、感冒薬の購入を希望する 4 つの事例を提示し、来客者への対応について小グループで討論 (Small Group Discussion : SGD) するワークショップ形式のものとした。東京都内の保険薬局 4 施設に勤務中の薬剤師 31 名を対象とし、介入群 16 人と対照群 15 人の 2 群に分けた。卒後教育プログラムは平成 21 年 3 月 17 日～ 25 日のうちの 2 日間、計 4 時間を介入群に実施した。プログラムの効果の確認は、模擬患者 (Simulated Patient : SP) によるシミュレーションテストにより行った。評価項目は、来局者情報に関して 21 項目、情報提供に関して 8 項目を設定した。プログラム終了 1 週間後にこの試験を実施した。

【結果及び考察】来局者情報については、対照群  $3.3 \pm 1.8$  項目 (平均  $\pm$  SD) であったのに対し、プログラムを受講した介入群では  $8.1 \pm 2.9$  項目と、介入群が有意に多くの情報を収集していた ( $p < 0.01$ )。また、情報提供についても、対照群  $1.3 \pm 0.9$  項目に対し、介入群  $2.3 \pm 0.9$  項目と介入群の方が有意に多くの情報を提供していた ( $p < 0.01$ )。討論内容を解析したところ、討論された項目ほど、シミュレーションテストでの実施率が高いことがわかった ( $p < 0.01$ ,  $r = 0.828$ )。以上の結果より、本プログラムが、保険薬局に勤務する薬剤師の一般用医薬品に関する来客者対応内容の向上に有用であることがわかった。